

令和元年度 小城市立牛津中学校 学校評価結果

1 学校教育目標 豊かな人間性を培い、志を高く学び続ける生徒の育成 ～主体性を高めることを通して～	2 本年度の重点目標 ① 確かな学力の育成: 基礎的基本的な学習内容の定着と家庭学習の習慣化を図る ② 豊かな人間性の育成: 認め合い支え合う集団づくりを推進し、感謝する心の育成を図る ③ 健やかな体の育成: 健康、安全に対する意識を高め、基礎的な体力の向上を図る
--	--

達成度 A: ほぼ達成できた
 B: 概ね達成できた
 C: やや不十分であ

3 目標・評価

① 確かな学力の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○教職員の資質向上	授業研究の推進	・「授業づくりのステップ1・2・3」を効果的に用いた牛津中授業スタイルを確立し、授業が分かりやすいと感じる生徒を全体の80%以上にする。	・「学び合う活動」を充実させるため、形態や活動内容の工夫を行う。 ・司会者の育成や、WBの活用を工夫することで、「学び合う活動」をさらに活性化させる。 ・教員同士の授業参観ウィークを設定し、気軽に授業を参観し授業改善に努める。	A	・「めあて」「まとめ」「振り返り」を生徒自身が意識して授業に臨むことができおり、おおむね80%以上の生徒が、「授業がわかりやすい」と感じている。	・全ての教科において、80%の生徒が「授業がわかりやすい」と感じるように、教科部会の時間の確保や参観授業の設定を行っていく。 ・話し合い活動を充実させるために、授業時間の場の設定だけでなく、人間関係づくりの活動を行っていく。
教育活動	●学力向上	学習規律の定着と表現力等学力の向上	・学習規律を高めることで学習環境を整え学習意欲の向上を図る。 ・学びの交流を図ることで表現力の向上を図る。	・「立腰」や「授業の約束三カ条」を中心に生徒の意識を高めながら、学習規律の向上や学習意欲の向上を図る。 ・表現力の向上を目指して、学びの交流を取り入れた授業改善に今後も継続して取り組む。 ・朝の時間を活用したドリル学習を行い、基礎基本の定着を図る。	B	・「立腰」や「授業の約束三カ条」を中心に生徒の意識が高まり、定着してきている。 ・牛津中授業スタイルが定着しつつあり、授業も充実している。 ・朝の時間は、やることが多く、定着までに至らない。	・「立腰」や「授業の約束三カ条」に関しては、生徒・職員ともにさらに意識して取り組む必要がある。 ・牛津中授業スタイルの徹底及び継続。 ・朝の時間の工夫が必要。(取り組みの固定が望ましい。)
		家庭学習の定着と充実	・家庭学習時間1時間以上を1年70%、2年80%、3年90%にする。	・家庭学習の課題を曜日ごとに設定し、分かりやすく表示し、提出の徹底を図る。 ・家庭訪問で「学習の手引き」を全家庭に配布し、家庭学習の習慣化への協力体制づくりを行う。	C	・アンケートで『ほぼ毎日1時間以上、家庭学習をしている』に「あてはまる・概ねあてはまる」と答えた生徒は53%、保護者は46%であった。この結果は、学年毎に設定した目標を明らかに達成できていない状況である。ただ、教科毎に曜日で設定した課題提出は、生徒には取り組みやすかったという声が多かった。	・家庭での学習環境づくりの一環として、自主学習ノートに取り組む必要があると考える。ただ、それが形式的になったり、未提出が増えたりすることが考えられる。そこで、担任を中心として学年で連携を取り、学習内容、書き方、提出の3点にこだわって指導をしていきたい。また、教科毎に課題を設定することは継続していきたい。
	読解力の向上	・テスト等で自分の考えをまとめたり、文中の要点を抜き出したりする場面での無回答率を減らす。 ・学校図書館の全校生徒の年間貸出数を一人平均20冊以上にする。	・新聞を活用したワークシートを使用し、読解力の向上を図る。 ・魅力的な学校図書館となるよう図書館便り(かささぎ通信)を出してより多くの本を紹介する等、生徒の読書活動を活性化させる。	B	・朝読書、新聞コラムを活用した取組は継続して行ったが、回数が少なかつたせいか、大きな成果は感じられていない。 ・振り返りカードの記入をどの教科も行っているため、文章でまとめをする力はついてきている。 ・年間貸し出し冊数はまだ少ない。	・コラムを活用した取組の方法を改善し、書く活動を取り入れる。 ・図書館利用のための工夫。授業での活用を推進していく。蔵書の見直し。	
	◎教育の質の向上に向けたICT活用教育の実施	学習意欲の向上につながるICT利活用の研究	・効果的なICTの利活用で、質の高い授業や興味・関心を高める授業が行われていると感じる生徒を全体の90%以上にする。	・ICT機器活用の充実、教員のスキルアップのためにICT支援員と連携した研修や情報提供を行う。 ・教科間だけではなく、道徳や学活、総合的な学習の時間でも活用できるように学年間での情報交換や授業実践を増やす。	A	・生徒に行ったアンケートの「先生方は、電子黒板などを利用して、生徒の興味関心を高める授業を工夫されている。」という項目では、88%の生徒が肯定的な意見であった。目標の90%には届かなかったがほぼ同値であり、ICT機器の授業での活用はおおむねできていたと考える。研修については、全体の授業研究会を1回、教員同士の参観授業を数回行い、ICTに関する知見を高めることができたが、ICT支援員との連携による研修は実施ができなかった。	・授業研究会は来年度も数回行い、議論の1つに効果的なICT活用について考えていきたい。また、ICT支援員などの専門的知識を有する人を講師に招いたタブレット利用研修なども、校内研究などの年間計画の中に取り入れていきたい。
●志を高める教育	自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進	・自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちがあると答える生徒を80%以上にする。	・全ての教科、学校行事等を通して、夢や目標について自ら考えさせる時間や場面を設ける。 ・特に総合学習を通して「なりたい自分」を意識させ、具体的に何をどのように学んでいくのかキャリア教育の推進をはかる。	B	・「総合の時間や進路学習などを通して、自分の将来の夢や目標を考えることができた。」の項目では、74%の生徒が肯定的な意見であり、目標の80%以上にはわずかに届かなかった。どの学年においても総合的な学習の時間を活用した進路学習・キャリア教育は系統的に行っているため、多くの生徒が将来を考える時間を持つことができていると考える。全教科、学校行事等でキャリア教育の視点を持った指導をしていくことで、さらに目的意識を持った学校生活を送ることができると考えられる。	・来年度より「キャリアパスポート」の導入が決まっているため、活用していきたいと考える。進路学習だけではなく教科や学校行事を通して、学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりする機会をつくり、自己の変容や成長を定期的に自己評価することで、自己実現に意欲を持った生徒の育成につなげていきたい。	

②豊かな心の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	望ましい学級集団づくりの推進	・生徒一人一人が安心して生活できる学級集団づくりを推進し、学級生活満足率の割合を5ポイント以上増やす。	・年2回実施のQ-U診断テストの結果を分析し、それを活用するための研修会を実施して学級づくりに必ず生かす。 ・研修を通して各クラスの情報交換を行いながらお互い改善を図っていく。	A	・アンケートで『学校は、生徒が安心して学校生活ができる望ましい学級・学年集団づくりをしている』に、「あてはまる、だいたいあてはまる」と答えた生徒・保護者は、共に89%であった。また『Q-U結果を活用し、生徒が安心して生活できる集団づくりを推進した』に、「あてはまる、だいたいあてはまる」と答えた生徒・保護者は、77%であった。QU診断テストを十分に活用できていない部分をさらに見直す必要がある。	・年2回実施のQ-U診断テストの結果を分析し、それを活用するための研修会を実施して学級づくりに必ず生かしていく。また、そのことに対する各クラスの情報法交換や共通理解を行いながらお互い改善を図っていく。
		人権・同和教育の推進	・日常的に人権が尊重される環境作りを行う。 ・生徒一人ひとりの人権意識の高揚を図る。	・人権・同和教育を根底とした集団づくりに継続して取り組む。また、個人と集団の両面から人権意識を高める取り組みを実践する。 ・人権・同和教育に関する職員研修の時間を確保する。	A	・実行委員会形式による人権集会を、12月に実施した。また、各学年ごとに人権に関する道徳の授業や、社会科における身分制度の学習を実施し、人権意識を高める取り組みを行った。保護者アンケートの「差別を許さない学年・学級作り」では、「あてはまる・だいたいあてはまる」が84%であった。	・社会情勢の変化により、既存の内容だけでなく、新たな人権問題や人権・同和教育に関する課題は常に生み出されている。そのような変化に対応するため、夏季の職員研修では最新の情報を得られるように、12月の人権集会でも、全学年の生徒に共通認識を広められるような内容への改善を進めていく必要がある。また、道徳の授業の中でも学期に1度は人権・同和教育に関する内容を含めることができるようにしていきたい。
		道徳や特別活動の充実	・全クラス年1回以上、保護者に授業を公開する。 ・生徒の自己肯定感の育成を図る。	・学校全体の授業スタイルを早期に決定し、校内での授業の進め方をそろえる。 ・教材研究をした資料を提供したり、研修会で学んだ資料を配付したりする場を設けながら全校で意識を高めることを目指す。	A	・他校の公開授業等の研修会で学んだ資料を校内研修等で全職員に提供することで、道徳の取り組みに対する意識を高めた。また、校内研修で学期毎の道徳の授業の見直しを立てることで、計画的に授業に取り組むことができた。生徒アンケートで『道徳の授業を通して、自分の心や感性が豊かに成長していると思う』に「当てはまる、だいたいあてはまる」と答えた生徒は81%であった。	・道徳に対する意識をさらに高めるため、今年度授業で使用した道徳の資料や指導案等を保管しておき、次年度の教材研究に役立てたい。今年度は、学年毎の授業スタイルで取り組んできたので、次年度は牛津中の道徳の授業スタイルを確立するために、道徳担当職員を中心に話し合いを進めていきたい。
		生徒会活動の充実	・生徒会活動としての無言清掃やボランティア活動の推進による自己達成感の高揚を図る。	・各種会議が建設的で有意義な話し合いになるために、しっかりしたリーダー育成を行う。 ・生徒会行事の見直しや改善を行うとともに、校務分掌とのさらなる連携に取り組む。 ・ボランティア活動への参加や無言清掃を通して心の成長を図る。	B	・生徒が中心となり、主体的に活動する生徒会活動を実践した。本部を中心に、評議委員会、学級討議、専門委員会という活動の流れが確立していく中で、リーダーとなる生徒が育成できた。アンケートの結果から、公共心が育っていると感じている割合が、生徒・保護者ともに高かった。	・生徒会活動が活発になるにつれ、活動時間の確保が難しくなっており、生徒会行事の見直しや改善を工夫していく。 ・生徒会活動の充実を図るために、更なるリーダーの育成を継続させる。
●いじめ問題への対応	いじめ予防及びいじめの早期発見、早期対応の徹底	・生徒の変容を常に観察し、計画的な調査等を実施する。	・生徒指導部会や生徒支援部会の運営を充実させることで情報を共有し、職員研修等で職員のスキルアップを図り、いじめの未然防止に努める。	A	・生徒指導部会や生徒支援部会を毎週開いたり、毎月の生活アンケートを実施したりして情報交換や共通理解に努めた。また、生徒と保護者のアンケートでは、いじめの予防及び早期発見、早期対応に対する学校の取組に対する肯定的な意見は、87%で高い評価であった。	・今後も生徒指導部会や生徒支援部会の運営を充実させ、職員研修等で職員のスキルアップを図って、いじめの未然防止を推進していきたい。また、不登校(傾向)生徒の対応では、これまで通り、関連機関やSC、SSWと連携し、支援していきたい。	

③健やかな体の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	部活動や体育的行事の充実	・部活動や体育的行事を通して健やかな体づくりの大切さを意識するようになったと感じる生徒を全体の80%以上にする。	・生徒の多様な体験を充実させる時間の確保をする。 ・生徒の心身の発達段階を考慮した部活動指導の効率化を図りながら、効果的な部活動の運営を行う。	A	・学校評価アンケート(保護者)において「学校は、部活動や体育的行事を通して、健康や体力づくりの重要性について指導している」の質問項目に於いて、「あてはまる」「だいたいあてはまる」という肯定的な意見を88%の割合で得ることができた。また、生徒用の同項目においては、85%得ることができた。	・体育的行事や保健体育のある領域では、見学者が多くなることもあるため、領域や種目の特性を丁寧に生徒に落とし込みスポーツの楽しさを伝えていく必要があると考える。 ・部活動においては、目標の設定とそれを達成するために部内規律も必要なことの一つであることを生徒に認識させる必要があると考える。
		食育の推進	・弁当作りを通して望ましい食生活の習慣を獲得し、自己の健康を管理していく能力を身につける。	・学校給食を「食育」の中心に据え、健やかな命を育むための食に対する知識の習得と意識の向上を図る。	A	・弁当作りを通して、普段食事を作ってくれる人への感謝の気持ちが育っている。また、機会があれば作ってみたいと考えている生徒もいた。 ・食事をしっかりとることことが大切、やや大切と考えている生徒がほぼ100%近いことが、健康に関する意識調査から食の重要性は認識していることがわかった。	・弁当を作るだけでなく、食材の準備や後片付けなど弁当作りに関する一連の作業にも取り組ませたい。彩りだけでなく、栄養のバランスも意識することが大切であることを知る手立てを考える。 ・給食時の残菜を減らす手立てを考える。
		健康、安全、生命の尊重に対する意識の向上	・「命の教育」を実施し、自他の生命を尊重する態度を育てる。 ・救急救命の技術の習得と意識の高揚を目指す。	・講話実施後にグループワークを確実に位置付け、主体的な学びを促進させる。 ・長期休業中に全職員参加型の緊急時対応訓練を消防署と連携して実施する。	A	・「いのちの教育」が6年を経過し、グループワーク・ロールプレイを含めた講話と、食育・復興支援活動といった独自のスタイルが定着し、保護者・生徒共に90%以上の評価を得ることができた。生徒の主体的な学びが深まった。 ・消防署の協力の下、アレルギー対応研修を含めた形で、緊急時のシミュレーション演習を緊迫感を持ちながら有意義に実施することができた。	・時間が足りずに講話後のグループワークが実施できない学年があったため、時間の確保、実施形態の工夫を行う。 ・生徒会との連携の形態は整ってきたが、職員への周知と連携が不十分と感じた。まず職員への打合せを十分に行った上で、スムーズな進行ができるように企画・立案を行う。
		基本的な生活習慣の定着	・基本的な生活習慣の定着に向けた啓発活動を推進し、規則正しい生活が送れるようになったと感じる生徒を全体の80%以上にする。	・昨年度の方策を継続し、家庭の協力が得られるような啓発活動を実施する。 ・生活アンケートの中で「ノーテレビ・ノーゲーム・ノースマホ」の項目を設け、毎月意識させることで、家庭への啓発活動を行う。	B	・睡眠時間や生活のリズムを考えながら、「就寝時刻」や「起床時刻」を意識した生活を送れたというアンケートの調査結果は、生徒69%、保護者57%であった。夜更かしをしている生徒が、依然として3割ほどおり、家庭でも意識はされているが、まだ十分には改善されているとは言えない。継続した啓発活動が必要だと考える。	・家庭での生活習慣の改善(特に、電子機器やゲーム等の使用による夜更かし)への取り組みは継続しながら、毎月、生徒自身による振り返り等を行い、意識を高める活動を行う。また、保護者に対して、電子通信機器・ゲーム等の使用について、『家庭内でのルール作り』を行って実践するように協力を求める啓発活動を継続して行う。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	校務等の効率化の推進と教職員の意識の向上	・効率的な業務への取組を推進するとともに、教職員の時間外勤務について1か月当たり前年度比10%削減する。	・各教職員の勤務時間を確実に把握し、特定の教職員に業務が集中しないようマネジメントを行う。 ・定時退勤日を設定し、部活動を含めた勤務時間の意識改革を図る。	A	・新規職員が半数近くになり、年度当初より業務の改善に取り組んだ。特に退勤時間の目安を設定し、必要以上に超過することのないようにした。部活動の時間を基準として、夏季と冬季での退勤時間の目安を設定したり、部活中止日は定時退勤日にしたりすることで超過勤務時間を減らした。その結果、昨年度年間超過勤務時間より、全体の月平均7時間減少し、昨年度比10%削減を達成することができた。	・現在の平均超過時間が60時間を超えているので、来年度はさらに50時間に近くなるように目指す。そのために、休日等の部活動の活動内容の見直しと効率化、対外試合の見直し等の活動内容を精選していくことが必要となる。また、本年度同様に平日の退勤時間の目安を設定して、必要以上に超過しないように今後とも継続していく。 ・年度替わりの校務分掌を再確認し、一部の先生に負担がいかないように配慮を行う。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

『確かな学力の育成』では、牛津中の学習スタイルが定着しており、すべての教科において教師の指導法に対して9割を超える生徒がわかりやすく、教育機器を効果的に利用して工夫されていると感じている。また、立腰の取り組みや課題学習・提出物を確実に実行する取り組みも徹底されており成果が上がっている。しかし、依然として家庭学習の習慣が身につけておらず、毎日1時間以上家庭学習を行っている生徒の割合は、半数を超える程度である。さらに、読書の習慣が不十分であり、図書館利用者が伸びておらず、読解力向上のためにも今後力を入れる点と考える。本年度設定した『志を高める教育』においては、特活の時間等を利用して自分の将来を見つめ進路を考える学習を行い、将来の夢や目標を持つことができたと考えられる生徒が増えている。『豊かな心の育成』では、Q-U診断テストの結果を生かした集団づくりに取り組んだ結果、生徒・保護者ともに9割近くが「安心して学校生活ができる」と答えており、成果が見られる。道徳や人権教育の授業を通して互いを認め合い、心を育て自己肯定感を高めるように教師が活動を行った結果、8割以上の生徒・保護者は「成果が見られる」と答えている。内面的な成果は向上しているが、相手の気持ちが十分に理解できていない生徒への指導が今後の課題である。『健やかな体の育成』では、部活動や体育的行事を通して健康や体力づくりの重要性についての指導が十分に行われていると感じている生徒・保護者が8割を大きく超えている。また、食育やいのちの教育に関する取り組みにおいても生徒・保護者において、9割を超える高い評価を受けている。その反面、「睡眠時間や生活のリズムを考えたい生活を送る」という項目で、依然として夜更かしをする生徒がいる点を改善したい。『業務改善・教職員の働き方改革の推進』において確実に改善しているが、今後も継続して働きやすい環境作りに取り組んでいきたい。

●は共通評価項目のうち必須項目、○は独自評価項目